

死に逝く人間と贖い救ってくださる神

苦難に直面し、死に逝く者としての人間が歌われている。しかし、神は信頼する者らを贖い、陰府（シェオール）から取り上げて下さる神がおられる。一連のコラの子（エルサレム神殿聖歌隊）の歌の最後のもの（42 編～49 編）。また少し後にコラの子らの歌は登場するが、この 49 編は、知恵文学に連なる箴言・格言・「コヘレトの言葉」に通じる歌である。まず、詩編 49 編を朗読しよう。

1. これに聞け、耳を傾けよ

神の知恵（ホクマ）、叡智（ハグートとブノート 黙想と理解）を与えられた人の言葉に聞き、耳を傾けよ。神は直接にではなく、霊と知恵に生きる人の言葉を通して、あなたに語られる。人は土から創造され、神の息を吹き込まれて生きているものであること。命は誕生から死の制限の中で、神から預かっているもの、人は有限であることを知ることこそ大切である。

2. 財宝、自分の力に頼る者たちの行く末

財宝（7 節、11 節）、自分の所有地、自分の力に頼る者たち、自分の口の言葉に満足する者、名誉に頼る者（17 節、18 節）は永続しない。人が羨むような幸福も永続的ではない。その行く末は心許ないものである。そのような人々は、災いや死に直面して、それらに打ち勝つことはできない。人は死に直面して、何一つ永続するものを持っていない。社会的名誉も評価も彼の死の後を追って墓に下るわけでもない。

3. 神に信頼を置く者

これに対して神に信頼する者は災いに直面し、悪意に囲まれても（6 節）恐れることはない。神はその人（突然「わたし」が神の対話相手として登場する）。「わたし」の魂を贖い（pidyōwn 9 節、yipdeh 16 節）、陰府の手から引き上げてくださる。聴き手は「あなた」として、「恐れることはない」と呼びかけられている。まさに、自分と神、自分と他者、自分と被造物社会との関係が変容される（造り変えられる）、復活の希望である！神を信じ、従う者は、人と比較して羨んだり、嘆いたりしない。

4. 「魂」「いのちの」価値

8 節と 9 節は厳しく響くが、逆に「魂」、「いのち」の尊さをも言い表していないだろうか！？親から譲り受けたり、自分の努力で所有した土地も安住の棲み処ではない。人は、死んでしまい、墓に葬られるのである。リフレイン「人間は栄華のうちにとどまることはできない。肉なる者としては、屠られる獣に等しい」。いや人は、走るのもチータより遙かに遅く、力も野獣より弱い。ブレーズ・パスカル（1623-62）は天才的人物であった。彼は、3 歳で母を失い、父によって育てられた。39 歳で死に、頭痛持ちで、頭痛を忘れるために考えたのが「パスカルの原理」（水圧機）であると言われている。12 歳の時に独力でユークリッド幾何学の定理 32 までを考え出した。16 歳で「円錐曲線試論」を書いた。ルーアンに移り、その後も数学の整数論、確率論、積分法について多くの発見をした。やがて、ヤンセン主義に触れ、回心してポール・ロワイヤル修道院で過ごす。「クレオパトラの鼻、もしこ

れが低かったら地上の全表面は変わっていたことであろう」(『パンセ』津田穰訳、新潮文庫、昭和(ママ)27年、162)。歴史的なものが移り行くこと、美貌なども大きなことではないことを考える。また、「人間は自然の内で最も弱い一本の葦に過ぎない。しかし、人間は死ぬことを、それから宇宙の自分よりずっとたち勝っていることを知っているからである。宇宙は何も知らない。…ここに道德の原理がある」と言う。(347)「心はおのずから信じるものであり、意志はおのずから愛するものである。だから真の対象がないと、心も意志も偽りのものに結びつくよりほかない」(81)も名言。そしてアウグスティヌスの『告白』に繋がる名言ではないだろうか!「あなたは私たちを、ご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。」(山田晶訳、中央公論社、昭和(ママ)43年9月10日 59頁)これらの言葉は、「コヘレトの言葉」3:11「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることはゆるされない」。深い言葉である。万物流転の中で「永遠」を求めるものが人間である。パスカルは言う、「哲学者の神ではなく、聖書の神!」